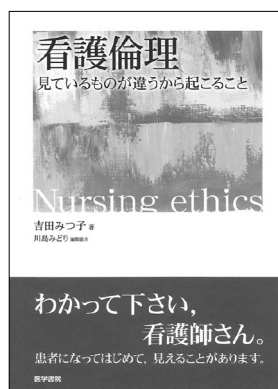


『看護倫理 見ているものが違うから起こること』

看護実践を倫理的に分析することは、看護とは何かを問うことである

著：吉田みづ子，編集協力：川島みどり／定価：2,310 円(本体 2,200 円＋税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



看護師は自らを「医療従事者として患者のもとと近くにいる」「患者に寄り添う」存在であると自負している。また、看護師は学生の頃から、安全、安楽で自律を尊重した看護は基本であり、「患者を中心に考える」ことを当然のこととして教えられる。したがって、看護師は常に「患者のために何が最善か」を考え、実践しようとするのである。この点において、看護を倫理に基づく実践と捉えることができる。

しかし、いくら患者の立場に立って考えようとしても、気持ちがすれ違う経験を誰しもがもつのではないだろうか。人はそれぞれ個性をもった存在であり、何を最善とするかは、人によってあるいは社会や文化によって異なる。患者、家族、看護師には個々の体験世界があり、それゆえにすれ違いが生じるのである。

本書では、このすれ違いが起こるメカニズムを丁寧に提示してくれている。まず、臨床で遭遇する場面を16のストーリーとして取り上げ、各ストーリーにおける看護師、患者、家族それぞれの体験がどのようなものであるかを、マンガと解説で示している。マンガを活用することによって、患者、家族、看護師それぞれの体験世界に私たち読み手が入り込みやすいよう工夫している。そして、「そのストーリーにおける問題はなにか」「いかに対応すればよいのか」を丁寧に探っている。

この看護師の対応についての探究では、患者との相互行為の積み重ねを重視している。看護師の対応を単に「間違っている」と指摘するのではないのである。価値観が多様化する社会であるからこそ、看護行為の善し悪しを判断する基準は患者との相互行為の積み重ねによって決定づけられる。したがって、看護師の行為を自律性の尊重、無害性、善行、公正といった倫理原則を駆使して分析するだけではなく、まず複雑な状況を整理し、その行為が看護の目的に照らして「善い」とされるか否かを分析する。そして、その状況にうまく対応するためにできることはなにかを省察することによって、倫理的に適正な看護の実践を繰り返すことができるのである。

専門職の倫理の中心には必然的に「理性」(考えること)があり、看護師の倫理的な実践は看護の目的に基づいた行為の決定である。直感や予感による行為が患者の価値観と合致したとしても、それは偶然の産物であり、専門職としての看護倫理に基づく実践ではない。まさに本書は看護師の豊かな経験を素材にした看護倫理のアプローチを扱っており、そこには「看護とは何か?」という問いが内包されている。本書を詳読し、事例を活用しながら学生同士が議論することで、学生が専門職としての看護師の責務を学び、職業アイデンティティを形成するのにふさわしい一冊である。